

ことわざの衰退と再生 ー再解釈と新たな越境の可能性ー

北村 孝一

今日の日本でことわざが衰退していることは、多くの人々（特に高齢者）が実感しているところでしょう。私自身も幼時の記憶をたどると、ことわざが現在よりもよく使われ、使われる表現ももっと多様で、生き生きとしていた印象があります。

ことわざが以前ほど使われなくなったのは、なぜでしょうか。表現自体が古くなり、しだいに使われなくなってきたという常識的説明は、少し違うのではないかと思います。そうした側面があることも事実ですが、これは途方もなく長いことわざの歴史のなかで個別には常にあり得ることで、一般的には、その一方で時代に合わせて改変されたり、新陳代謝によって新たな表現が生まれてきたといえるでしょう。問題は、むしろことわざが使われる場が、おそらく 1960 年代からいちじるしく減少したことで、これは各地の方言の衰退とほぼ並行しています（背景には、高度成長によるコミュニティの崩壊／核家族化の進行とマスコミなどの文化的画一主義があります）。その結果、当然のことながら、生きたことわざに自然な形で接する機会が激減し、若者は受験勉強でことわざを知る本末転倒の状況となりました。テレビでは、ことわざをクイズにする光景がよく見られますが、テキストと「意味」のセットでは、ことわざは昆虫の標本のように死んでいます。

とはいえ、あるいは、だからこそというべきかもしれませんが、ことわざに対する関心や期待は、漠然とした形ですが、静かに高まろうとしていると、私には感じられます。そして、その根底には現代文明の行き詰まりに対する不安があるのではないのでしょうか。

情けは人のためならず

では、そうした期待にことわざは応えられるのでしょうか？ ことわざで何でも解決するかのような過大評価は、いわば彘肩の引き倒しで、感心しません。しかし、ことわざが現代社会の諸問題の解決につながるヒントを与えてくれるのではないか、と思われる事例があるのも確かなので、ここでは、論議の素材として、そのいくつかを紹介しましょう。

最初に取り上げるのは、大阪大学の発達心理学の研究グループが保育園児の行動を観察して、「情けは人のためならず」を実証した研究*です。このことわざは、（若者が）正しく理解していない例としてよく引かれてきましたが、それ自体が正しいかどうかはほとんど問われないうままでした。この研究は、人類史的な視野からその正当性を科学的に実証したという意味できわめてユニークであり、高く評価できます。ポイントは、単純な因果応報説ではなく、「巡りめぐって」ということわざの趣旨を生かし、園児の親切な行為を見ていた周囲の園児に着目し、観察したことです。ことわざ研究の観点からすると、古くから

のことわざが今日的に“再解釈”されたといつてよいでしょう。

“再解釈”は、ことわざの歴史のなかで従来からある程度繰り返されており、たとえば、「老いては子に従え」は、江戸時代に「三従の教え」から離れ、むしろ男性に向けて使われるようになりました。また、「犬も歩けば棒に当たる」、「由らしむべし知らしむべからず」などは、“再解釈”により規範主義的解釈から脱して、新たな批判的意味を獲得した表現といえます。「二度あることは三度ある」も、リスク管理の視点を導入し視野を広めることによって、根拠不明の俗信から日常生活の、否、それだけでなく文明史的にも重要な指針の役割を果たす可能性があります。

ヌチドゥ宝／天から役目なしに降ろされたものは一つもない

もう一つ、私が注目しているのは新たな“越境”の可能性です。日本の文化は、古くは中国文化の、近代には西洋文化の大きな影響を受け、ことわざの領域でも多くの表現を受容してきました。ことわざは、ある言語文化の粋であるとともに、言語や民族を越えて浸透するインタナショナルな性質を併せ持っていますが、従来の越境は、基本的に先進文化からの流入というベクトルでなされてきたといつてよいでしょう。

これに対し、比較的近年に耳にすることが多くなった「ヌチドゥ宝」は、ウチナーグチ（沖縄のことば）の黄金言葉（クガニクトゥバ、ことわざ）で、琉球国最後の尚泰王の琉歌に由来するともいわれます。また、「天から役目なしに降ろされたものは一つもない」は、アイヌ語のことわざ（カントオロワ ヤクサノ アラン ケペ シネカイサム）で、人間だけの話ではなく生き物すべてを視野にいれているところがユニークで、今後日本語のなかに定着する可能性があるものです（萱野茂は『世界ことわざ大事典』にこの表現を収録し、池澤夏樹の『静かな大地』では2カ所で登場しています）。ここで示した二つの例が従来の越境のベクトルと異なることは、誰の目にも明らかでしょう。「先進→後進」という枠を取り払い、時空を越える新たな“越境”に、私はことわざの新たな可能性を感じています。

今回のフォーラムでの「ことわざを編む」のような試みも、こうした“再解釈”と新たな“越境”の可能性を視野に入れて積み重ねられていくことを期待しています。

* Kato-Shimizu Mayuko, Onishi Kenji, Kanazawa Tadahiro, Hinobayashi Toshihiko (2013), "Preschool children's behavioral tendency toward social indirect reciprocity." PLOS ONE 8(8) : e70915.

参考文献

仲村優子『黄金言葉（くがにくとぅば）：ウチナーンチュが伝えることわざ 200 編』（琉球新報社、1997）

柴田武ほか編『世界ことわざ大事典』（大修館書店、1995）

北村孝一『ことわざの謎 —歴史に埋もれたルーツ』（光文社新書、2003）